

トリアル・アンド・エラー
Trial & Error No.55



特集 ソマリアは今

新しい展開をめざす	2
難民のゆくすえ	4
大きな可能性を秘めたソマリアの大地	8
ソマリア農場の歩み	10
ソマリアでお料理教室	12
『REFUGEEES』より — どう解決する物資輸送	14
ルークからの便り	16
Dear, My Friend	18

新しい展開をめざす

岩崎 駿介 (JVC 代表)



ジュバ川で釣り

ソマリア視察へ

ソマリアは乾燥地域にある。私はまだ砂漠のこれが真中なのだという所に立ったことがないので、ソマリアが“砂漠みたいだ”と言って良いのかどうか分らないが、砂地の、いっさい植物も乾燥して針状に突立った、きびしい地域である。

私は9月中旬からJVC本部事務局の柴田久史君と一諸に、1983年の3月から続けているソマリア農業プロジェクトをこの目で実際に確かめ、ソマリア滞在中の12人のJVCメンバーや、そこで共に働いているソマリアの人達と話し合うことによって、今後どのような方向に活動を展開して良いのかをはっきりさせるため、初めてソマリアの国を訪れた。

ソマリアとエチオピアの国境沿いにはエチオピアからの難民70万人、その内、JVCが救援活動の対象にしているマガネイ・キャンプのあるルークの町周辺には、13万2000人の難民が滞在している。この人達は、長い人で1978年からすでに7年間も滞在中であり、毎年百人足らずの本国送還措置がとられているものの、基本的には固定的状況で、解決の見通しがたっていない。

この人達ももといエチオピア国内のオガデン地方は、エチオピア高地から続く丘陵地帯で雨もあり、生活するのに十分肥沃な土地柄であるという。ソマリ語を話し、イスラム教を信じている点において、まったくソマリア人そのものであり、植民地分割による悲劇をここにも見る事ができる。彼らは帰るに帰れず、かといってこの地にとどまって新しい生活を築いてゆくには、土地自身の条件があまりにもきびしく可能性をみる事がむずかしい。彼らが故郷を離れるときの様子をいろいろ聞いてみた。人

により大部話が違うので正確なことは分らなかったが、エチオピアに進軍したソマリア軍を支援し、その後ソマリア軍が撤退せざるを得なかったとき、その後のエチオピア軍による報復を恐れて、集落や部族ごと逃げだしてきたと考えられる。引くに引けず、出るに不出るである。

われわれは何故この仕事をするのか

ルークの現場では税田君、農業技術者の久保君等の出迎えを受け、彼らが農民とともに作ってきた農場をみせてもらった。ジュバ川のほとり、約50ヘクタールの地に、4本の灌漑用水路を引き、トウモロコシ、玉ねぎなどを植えている。私が行ったときは、丁度刈り入れのあとで、青々とした緑の畑をみることはできなかったが、それでも試験農場においてはトマト、オクラ、パパイヤなど豊富な野菜と果物を栽培していた。すでに3回目の収穫を得た畑もあるとのことであった。

われわれは何故この仕事をしているのか。何故ソマリアの人達とこの不毛な土地で農業をやっているのか。またソマリアに来てこのようにやること自体、ソマリア人にとってどのような意味を持ちえるのか。是か非か。われわれはいろいろな角度から議論した。われわれは今やっていることは正当であるとして議論を出発させるのではなく、もしかしたら何か間違っているかもしれないという前提で話し合いを始めた。議論はふたつあり、ひとつはこの仕事を意味あるものと認めるか否かであり、もうひとつは認めるとしたら、それではどうやるかである。この「やり方」の問題は非常に重要であり、その仕事の意味を認めたとしてもやり方次第では、すぐに仕事自体が

否定的な意見に転化するからである。

議論の結果、われわれは次のような原則をひきだした。

1. この活動に意味をみること。すなわちたとえこのソマリアの人達が明日にでも故郷に帰れる条件を獲得し、一目散に故郷へ引きあげていっても、この地においてこの農業プロジェクトを続ける意味をみる。つまりたとえ仮設的な意味しか持ち得ない結果に終わっても、このプロジェクトに意味をみる。
2. しかしゆっくりやること。これはスタッフが病気になるという意味もあるが、それ以上に砂で築いた水路の堤防が崩れないで、あたかも昔からあった自然の一部ようになる迄には、植物が自然に育成するだけの十分な時間が必要である。つまりわれわれの気持として決してあせらないこと。
3. もとより彼らが主役でなければならない。彼らとその時に置かれている状況によって、生活を築く場合の共同の部分を組織することが十分に出来ないとき、その手助けをすること。彼らは基本的に状況がいかに厳しかろうと、彼ら自らが自らを組織せねばならない。われわれと接点ができるのは、彼らが彼らの日常生活を築こうとするときに生ずる。共同の水路をつくり、畑を作り、学校や生活を律するルールを定めようとするとき、われわれは経済的に、技術的に一定の役割を演ずることができる。ソマリアの場合には共同の主要水路は JVC のイニシアティブで作るが、それに集結する各個別水路と畑の建設は、彼ら自身が自らを組織して行うこと。また、0.5 ヘクタールを得たある農民が自分だけ楽をしようと、その半分を他人に渡し自分の分まで耕作してくれと頼むずるさを皆でどうやって防ぐかという共同のルール作りにも、その話し合いの過程で参加できるかもしれない。
4. しかしそれ以上に望ましいのは、JVC のメンバー自身が卒先して自然に立ち向かうことだ。もしわれわれが生きる勇気みたいなものを持ち合わせているなら、困難に立ち向かう気力を彼らと分かちあうべきだ。これが真の友人の基礎をつくる。

すべての人の利益のために

その他肥料のこと、燃料等のエネルギーのこと、

堤防建設の過程での賃金労働のこと、自給用作物と換金用作物との割合のことなど、JVC のみんなといろいろと話し合った。中でも、われわれがこれまでの努力で築いた農地は、まだ50ヘクタールであり、この度拡張が決ったあと50ヘクタールの分まで含めても合計100ヘクタール、農民200家族の一家族当たり0.5ヘクタールの土地しか与えることができない。人員にしてせいぜい1000人。しかしわれわれがかかっているマガネイ・キャンプの人達でも1万3000人はいるのだ。彼らの中で農地を得られるものと、得られないものの不平等性をどうするか。そのためには、われわれの農場での経験を農地を得た一部の人達のみのためではなく、もう少し普遍的意味を持ち得ないか。その取れた食物からの利益が公平に分配されると同時に、土地を得られない人達も毎日、農場に来て何か得るものがないだろうか。われわれは、以上のような原則を確認しつつも、未解決な問題の大きさを思い、それでも今後に向けて次のような方向を決定した。

1. より多くの人に利益し、生活の強靭さを得るため、農業を基本としつつも、養鶏、コンロの改良、料理教室、読み書き教室、農器具改良などの多面的取組を同時平行的に行う。
2. 拡張農地はキャンプからできるだけ遠くないところに、難民自身の組織能力を基礎に共同で建設をはじめます。
3. 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の定住を急ぎたい意向もあるが、農民自身の生活改善の要求に比例して、内容を発展させ決してムリをしないこと。

ソマリアは毎日、朝7時にミーティングをもち、その日の作業スケジュールを確認した後、農場やそれ以外の現場におもむく。暑い日なか、午後1時から2時まで昼めしぬきで勢いっぱい働く。午後のひとときは休憩して、明日にそなえる。夕方、日が暮れなんとする頃、河面をすべるように帰集する白い鳥の群がいる。夕陽に映える白い羽根。

皆さん、この文章を読んだ皆さん、行けるものなら、状況が許すなら君も行って見たまえ。ソマリアの過酷な自然の中に身をおくと、はりさけるような熱さと静寂の中に身をおくと、だれでも間違いなく生きている実感がするものだ。得るものは大きい。地球の広さと、土地と土地とのつながりの深さを自覚せよ！

難民のゆくすえ

掛 村 均

(ソマリア事務所長代理)

エチオピアからの手紙

9月の下旬、見慣れぬ切手を貼った妙に厚い封筒が事務所に舞い込んできた。JVC エチオピアの事務局長、内山田氏からの活動報告である。

「おっ！ アジスアベバから郵便物が届くのか」今まで私は JVC エチオピアとの直接の連絡は、両国の関係からまず不可能と踏んでいた。(実際この郵便物が届いたのはベレット・ウェン近くと北部の国境線上でエチオピア軍との紛争が激しくなったと伝えられた直後である)。エチオピアにおける JVC の医療活動の概要も東京本部から間接的に得てきたというありさまで、いつも「隣の国なのに」といらだっていた。日本で北朝鮮の情勢をモスクワに問い合わせている様なものである。

我々のプロジェクトが対象とする難民はそのほとんどがエチオピア領内オガデン地方(東部エチオピアの広大な乾燥地帯)から来ているのは周知の事実だ。当然「エチオピアはどうなっているのか」という疑問が生じてくる。その答がそのままソマリアに難民が流れてきた理由となるからだ。

難民発生の理由

ところがこれが分らない。分らないというよりも、一概にはいえない。ソマリアが「難民受入国」という名前を貰ってからそろそろ10年になる。もともと遊牧民であり、部族単位で行動している彼らに「越境」という意識があったかどうかはともかくとして、実に様々な理由で彼らはやってきているのである。

狭義の難民の定義に当てはまる者達がまず居る。エチオピア政府による急進政策のために政治的迫害を受ける怖れを抱いて逃れてきた者たちである。特に前政権(ハイレ・セラシエ皇帝)に協力的であった者に対する迫害は、家畜や農作物の収奪、徴兵、投獄等の形で行われ、部族の結束は打撃を被り、家族離散に追いこまれた彼らはソマリア国内に流れ込んで来た。

干ばつによる打撃も筆舌に尽くし難い。作物は立ち枯れ、家畜は死に絶え、飲料水にも事欠く中、じっとしている方がおかしい。1981年春の干ばつは過去30年間で最悪といわれ、国連と民間団体が協力し

救済物質の緊急援助に集中したのだが、やはり多くの飢餓民が息をひきとった。

政治的・経済的理由の他に社会的理由を記すとなると話を植民地時代に戻さなければならない。

ソマリ族が英・仏・伊によって分断されていた当時(19世紀半ばより100年間)、伊・エチオピア間に戦争(アドワの戦い)があった。戦勝国エチオピアはオガデン地方を領有する。以来オガデンはエチオピア領とされ、77年に激化した「オガデン紛争」もここに端を発している。そしてエチオピア領内におけるソマリ族が差別の対象となっていることは想像に難くない。事実、教育や就職の機会が極端に制限されていると聞く。

社会が不安定になった時、その歪みがまず弱者を襲うことは世界中どこでも同じだろう。ずいぶん古い話になるが、関東大震災のどさくさに紛れて日本は文字どおり官民合同で在日朝鮮人を虐殺した。そのような忌むべき事態が明日にでも起こりそうな雰囲気を感じることがある。

差別のない国へ行きたい — 難民となる理由としては十分ではないか。

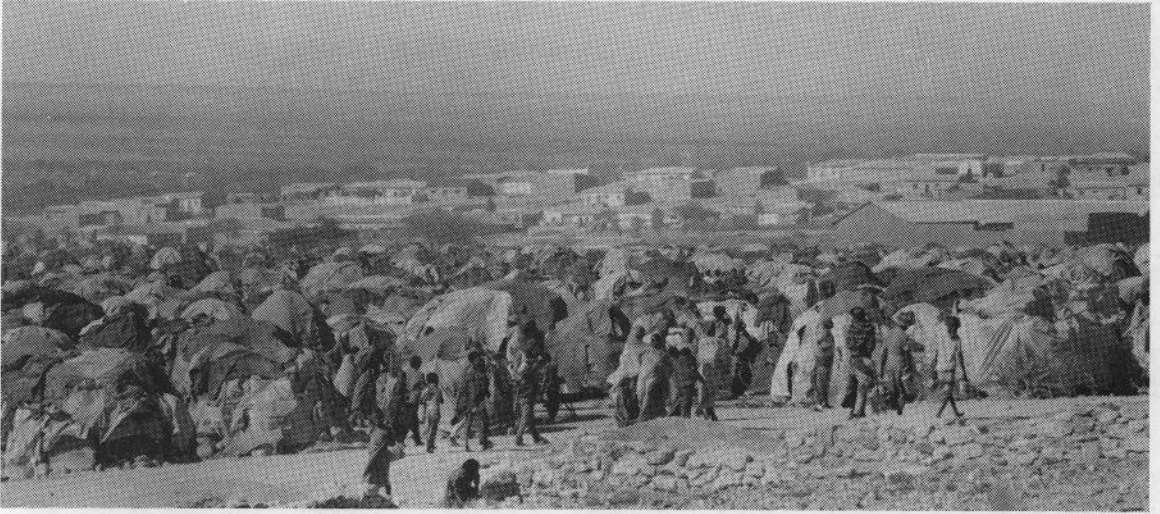
エチオピアばかりを非難しても始まらない。ソマリア政府がオガデンに向けてラジオ放送を流したことがある。

— 明日、ソ連・エチオピア合同軍がおまえの村を襲う。早くソマリア領内へ逃げて来い！ —

取るものも取りあえず、大混乱の中の人々は逃れてきた。そしてこの放送は真実を伝えていなかったのである。「それじゃ、帰ろうか」とはいかない。険悪な関係にある両国の国境を越えて、そう気ままに行ったり来たりできるものではない。

それでは大量の難民を受け入れて経済的に逼迫しているはずのソマリアがなぜこのような行動に出たのであろうか。可能性は2つある。

難民の数が多ければ、それだけ国際援助が沢山やってくる。当然「おこぼれ」も期待できよう。世界最貧国の1つであるソマリアにとってこれは魅力的であるに違いない。さらに極めて政治的な配慮がなされているとも取れる。オガデンにいるソマリ族の多くは現大統領シアッド・バレーと出身部族を同じ



くする。とすると、いまだに北部で反政府ゲリラが活動しているというソマリアにおいて、オガデンからの難民流入はそのままシアッド・バレー体制の勢力基盤を数的に固めることになる。

そうとも知らず難民はやって来る。死ぬ思いでやって来る。

難民発生の理由をもう一つだけあげよう。エチオピア政府による無宗教政策がそれである。去年半ばより教会や寺院の破壊が始まったと伝えられている。敬虔なイスラム教徒であるソマリ族にとってこの政策は断腸の思いであったに相違ない。全人口の100%近くがイスラム教徒であるソマリアにおいては、彼らのアッラーに対する祈りを邪魔する者はただの一人もいないわけで、これも越境の理由に充分成り得るだろう。

ここに挙げた難民発生の政治的・経済的・社会的・宗教的理由の総てが政府から発表されたものでもなければ、新聞、雑誌の類いで報道・解説されているわけでもない。私が勝手に難民との会話の中でちょこちょこと尋ねてみた1年間の結果をもとに、これも勝手にまとめてみたものであり、全部が正確とはいえないだろう。

またゲリラの存在はもちろんのこと、難民の出身地や部族問題に言及することすら禁じられているこの国で、政府による虚偽の放送、大統領の基盤固め、援助の横流し、兵隊狩り云々を確たる証拠もなしに持ち出して良いものかどうかとも思うし、(書いてしまったが)この様な状況下で難民の出てくる理由の究明は困難であり、その調査だけに集中してみるのも一興であろうが、私の今の仕事から少し外れてしまう。要するに難民発生の理由は「一概にいえない」

い」のである。

ソマリア政府の対応

理由はともあれ、難民がやって来た。それも大量に。現在政府が発表している難民数は75万。これは世界最大の難民集中であり、大部分が婦人・子供あるいは老人である。これだけ膨大な数の難民がソマリアの生活環境に影響を及ぼさぬわけがない。

樹木や灌木は小屋を作ったり、薪に用いるために使いつくされた。水を得るために河床に穴を掘り下げたので、地下水位が下がってしまっている。生活圏の破壊である。地元民の生活を圧迫し、治安が脅かされる。

一時の窮状を脱し、国際機関の援助を何年も受け続けると、誇り高かった遊牧民に依頼心が育ち、働かずとも食えるという状態に簡単に甘んじてしまうようになる。アフリカ諸国に見られる「援助症候群」の極端な例がこの難民に見られるのである。

街に流れ出る者たちは概して低賃金でも雇用されようとする。当然労働価格が抑えられ、労働力の過剰供給がソマリアの失業問題の一大要因となる。難民発生のもたらす影響を述べ始めるときりが無い。

それでは、これほど大勢の「お客さん」の訪問を受け、主人たるソマリア政府はどう対応しているのか。基本的には来た者は拒まずという態度を一貫してとっている。世界最貧国にしてはずいぶんと太っ腹なのだが、大ソマリ主義(エチオピア東部、ケニア北部、ジブチにいるソマリ族と現存ソマリア民主共和国とが大統一すべきだという主張)との矛盾を避けると、こういう方針となる。

少し教科書的になって恐縮だが、難民問題の恒久

的解決法として UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は次の3つを規定している。

1. 自発的な本国への帰還
2. 第一次庇護国での定住
3. 第三国への定住

1.の場合はエチオピアへ戻ることを意味するが、これはエチオピア内部の情報を鑑みて現段階ではまず不可能。ソマリア政府は強く否定しているが、相当数の帰還者がいる模様。だからといって状況が好転しているというわけでもないらしい。「ソマリアの方が経済的にも治安上でも落ちつくとしても、やっぱり、皆生まれ育った故郷がいいのでしょうか」とは、去年11月官民合同ミッションの一員としてエチオピア視察した星野事務局長の弁である。しかし本当のところは私には判らない。

3.の第三国定住となると、これも困難といわざるを得ない。第三国とはほとんどが先進国のことであり、その複雑怪奇に込み入った世界にラクダの尻を引っぱたいて暮らしていた素朴な彼らを放りこむのは酷というものだ。教育を受けず、適正技術を身につけていない者を受け入れるわけにはいかぬと、背広を着た人種はのたまうだろうが、彼らだってそんな固苦しい世界へ行くのはまっぴらご免だろう。

とすると、残されたのは2.「ソマリアでの定住」ということになる。ソマリア政府は83年、難民の自国内定住を認めるという方針を打ち出した。JVC



難民のための識字教育

が難民の自立促進を目標とした農業プロジェクトをこの地で開始する直前である。

定住政策はその後討議を重ね（机の上だけでという感じではあったが）今年より来年にかけてその具体的方策がとられようとしている。ソマリアの難民問題と援助政策はちょうど今大きな分岐点にさしかかっているといえよう。

さてここで NRC（ソマリア国家難民局）の要人 D 氏に少しだけ登場していただく。彼は難民救済プロジェクトを遂行する NGO にとってソマリア政府の最初の窓口となる人物である。

「掛村君…。正直にいうと私は判らない。一体今の難民問題にどう対処してゆけばよいのか。暗中模索の感を拭い去れない」。

— 大言壮語を得意とするソマリア人の中にあって珍しい人だな。しかしコミッショナー代理のあんたが判らないではちと困るぞ。

「正直にいうと、断わったはずだ。我が国が難民受入国として何十年という歴史を持っているなら話は別だが…。それにわずか数年の間にこう大勢来られてはとても対応しきれない。難民問題に関していえばソマリアは初心者だよ。試行錯誤を繰り返している」。

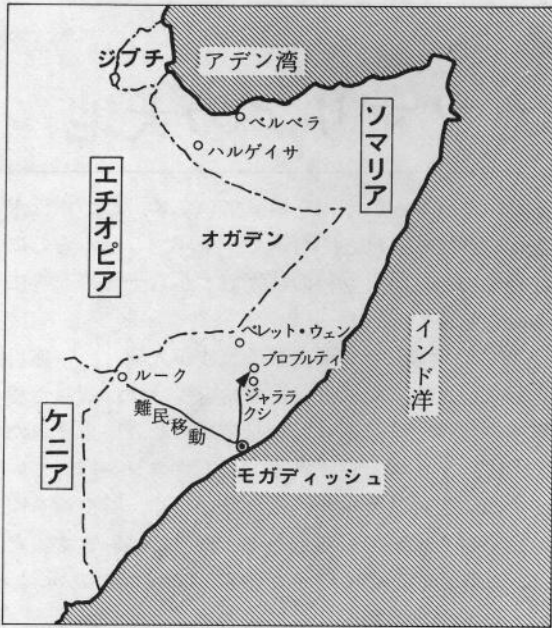
— なるほど。しかしソマリア政府は現実に定住政策を自信満々に打ち出しているじゃないか。

「他にどんな解決法があるんだ。難民を強制送還することは絶対にできない。かといって受け入れを拒否することも受け入れたまま放っておくこともできない。彼らは我々と同じソマリ族、ワラロ（兄弟）なんだよ…」。

難民の将来

去年の半ばより今年にかけて新たに5万人の難民が流れて来た。「新難民（New Arrivals）」と呼ばれる。最初、トランジットセンターに収容された彼らは、今、ソマリア政府によって新難民キャンプに移動させられている。JVCが補助給食プロジェクトを行っているルークを例にとってみよう。（地図を見てもらいたい）

ルークでは現在2万6000人の新難民がマグドール・トランジットセンターで食糧配給を受けている。それが、ごっそりとジャララクシの北60キロのプロブルティという所に移されようとしている。実に、700キロの道のりを移動することになる。（道路の関係でモガディッシュを経由しなければならない）



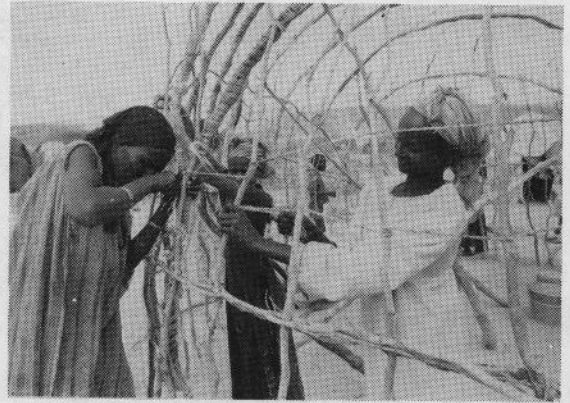
難民の移動の理由としてNRCは次の3つを挙げている。

1. 国境沿いに難民が多数住んでいるのは治安上問題がある。
2. 既存の難民と混り合い、食糧配給上困難な点がある。
3. 国境近くでの援助は新たな難民流入の“呼び水”となる。

現時点（9月末）ではルークでコレラが発生しているため、厚生省の方から難民移動を見合わせるよう指示があり、南部での移動はまだ始まっていない。難民を移すことの是非を論じる上で1979年の実際例を見るのがよかろう。ジャララクシにある4つの難民キャンプはベレット・ウェン周辺に流れてきた難民が移されてきたものである。

ジャララクシの難民の1人、シュクリ・マハムド氏は当時を振り返って、こう語ってくれた。

「そりゃいやだよ。エチオピアから逃れてやっとたどり着いて、落ち着き始めた頃に“他の所に行け”だろう。トラックに詰めこまれてきてみると、これがまた何もない所であ。また1からやり直しだ。全員が移されるのに4カ月はかかったかな。ただ、今は随分と整ったし、来てよかったと思っているよ。プロブルティ？いいんじゃないか。難民が来る前に色々と準備が進められているし、川も近い。オレたちの時より条件はいいようだ。ただ、今回はえらく遠くの方から運ばれてくるから心配だなあ…。お前も知ってのとおり、我々の仲間はほとんど女・子供・



老人だろう。トラックに詰めこまれ、長時間乗っていると体の弱者は参ってしまうよ」。

ジャララクシの難民キャンプは実に落ちついている。国境付近の、次から次へと流れこんでくる人たちによって作り出される緊張した雰囲気もなく、それぞれが自立の道を着実に歩んでいるように見える。この難民移転の成功例こそがソマリア政府の今回の政策への自信の裏付けとなっていると見て間違い無い。

そして難民が国境地帯から離れてソマリア内部に移り住むという事実は、難民の将来を占う上で重要な鍵となる。おそらく、今後政府による難民の配置換えが行われた後「難民のソマリア国内定住」という方向で着き進んでいくに違いない。もともと難民と地元民が同民族である（言語・慣習・宗教を同じくする）という条件がこの政策の大きな推進力となり、援助努力も徐々に「開発」の要素を強め、難民は難民と呼ばれなくなるだろう。ただし政府としては、外部より援助を得る作戦上「難民」と呼び続ける。一方“*We Are The World*”は歌われなくなる。

緊急救援—自立促進—（食糧援助打ち切り）一定住—開発という一本のラインを引いてみると、おのずと難民の行末も説明できるのではないだろうか。

しかし、しかしである。私は自主的帰還が最善の解決法であると今も考えているし、願いもしている。そしてその可能性は薄い。国境を離れ、こうしてソマリア内部に移り住む難民たちはもう、故郷に帰ることを完全に諦めてしまっているのだろうか。新しい土地で新しい社会を創り出そうと本当に決心しているのだろうか。

一つだけはっきりと言えることは、「難民キャンプ」と呼ばれる社会の中で、今日も多くの新しい生命が誕生し、オガデンを知らずに育ってゆく—それだけである。

大きな可能性を秘めたソマリアの大地

JVC東京事務所に在動していた鴫田三芳氏は、「砂漠に種をまく人の会」によって、福岡正信氏らとともにソマリアに派遣された。その視察中、感じる所のあった鴫田氏は、JVCソマリアに赴任することになったが、これは帰国報告会（兼出発決意発表会）での発言要旨である。鴫田氏はすでにソマリアにあり、文責はすべて編集部にある。

JVC農場の現状と福岡正信氏の自然農法

ソマリアの首都モガディッシュあたりの自然は豊かです。ジュバ川、シュベリ川というふたつの大河が流れ、平野は広く、ソマリアは農業的には自立し、農産物を輸出しているほどです。

JVCの農業プロジェクトは、ソマリア南西部のルーク地区のマガネイキャンプで行っていますが、首都モガディッシュからルーク地区に向かうと、風景はだんだんサバンナの様子になります。

サバンナにおける普通の自然状態は、3層の植生です。まず、パラパラとですが5～6mくらいの立木があり、次に人間の背の高さほどの低木があり、その下に雑草がはえています。ところが、難民キャンプの周辺では、5～6cmのトゲのある低木以外、あたりにはなにも緑がなくなります。あとになって知ったのですが、1本の木は葉から幹、根まで全体を難民は利用します。当然、そのあとは砂漠化するわけです。しかし、それは生きるために必要なことであって、私たちが、なんの対案もなくそれを止めさせることはできません。

さてJVCの農場は、ジュバ川のほとりにあります。この川は幅200mくらいで、年間を通じて豊富な流水があるということです。中州には豊富な緑があるのですが、川岸にはほとんど緑がありません。

農場には何本かの用水路が走っていますが、その両側には雑草がはえています。この雑草がはえるまでが大変だったということです。この付近は風の強いところで、表土の移動がはげしく、ちょっと大きい砂嵐がくると、用水路が埋まってしまう。それを防ぐためにも、雑草が有効なわけです。

また風害を防ぐために、周辺にはジャイアント・

イピルイピルという木を植えています。この木は水さえやれば成長はとても速く、1年で5mくらいになります。しかも豆科の植物ですから土壌の改善にも役立ちます。

JVCの農場には、現在104家族が入植し、一応自立しています。農民は食糧配給を受けず、取れた農作物を食べたり、売ったりして暮らしています。たとえば、メイズと呼ばれるトウモロコシを作っていますが、これは実を食べるだけでなく、幹や葉も家の建築材や家畜の飼料として、売ってもあります。ただ、試験農場で働くワーカーやJVCのスタッフには、わずかですが給料を払っています。

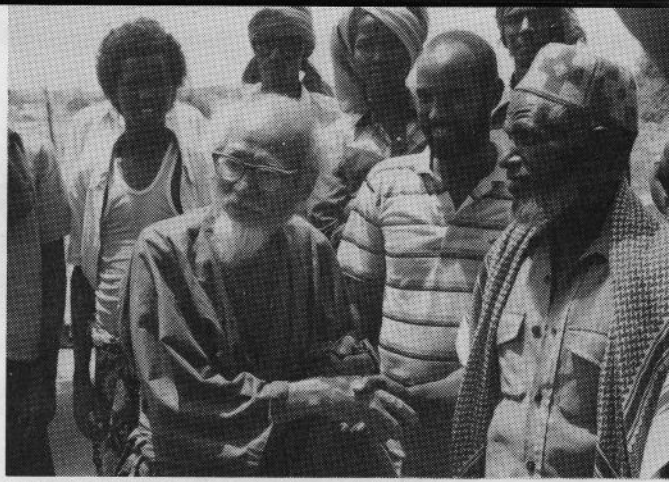
福岡さんと私は、持っていった種を農場のアチコチに蒔きました。モデルファームにはイネや大根をじか蒔きにしましたが、どれも3～4日で発芽しました。また、マンゴや砂糖キビなども蒔きましたが一番元気のよかったのは、温州ミカンです。

それから、福岡さんは「自然農法」の考え方を、いろんな人に話しましたが、どの人も熱心に聞いてくれました。使いたくても、肥料や農薬を買う金がないという事情も大きいと思いますが。難民たちは、何をどう蒔き、どう収穫すればいいか、具体的に知りたがりでしたが、行ったばかりの福岡さんには答えられませんでした。農業省の事務官なども、「農場を提供する」というほど熱心で、建設的に働きかければ、必ず歓迎されるという印象をうけました。

ただ、自然農法には土壌の改善など時間がかかります。その間、難民がどうして生活するのか、という疑問も寄せられました。ソマリアの農民の1家族当たりの耕作面積は4～5ha、JVCの農場では0.5haですから、片方で耕作して片方で土壌を改良する余裕はありません。

JVCの農場での最大の問題は燃料です。ジュバ川の水をディーゼルポンプで汲み上げているのですが、ディーゼル（軽油）がなくなると、すぐに被害がでます。この1年でも2回ほど被害をこうむりました。

このほか、NRAの植木プロジェクト（2カ所）も視察しました。ここはUSAIDという団体の月300万円ほどの資金で運営されています。64haの砂漠化したサバンナに、18種類もの木を植えていました。



福岡さんを囲むソマリア人スタッフと農民たち

の分解の速度も早めます。このことは、作物の実だけではなく茎や葉まで使い土地から収奪するだけの現状と合わせると、土地がみるみるやせていくこととなります。実際にJVCの農場でも、2年目の収穫が落ちている部分があります。

3番目は時間の問題です。農業には、いうまでもなく時間がかかります。JVCの主な資金は国連から出ますが、これは1年ごとの評価があり、失敗すると続かない可能性があります。日本国内からの資金も“ブーム”がおさまったあとどうなるか…。そして人材を長期的に確保しうるかどうか…。

最後は、技術的な問題です。たとえば、今回の視察で、多種多層な植生を作る必要を感じました。日射しを何重にもさえぎり、しかも、どれかひとつを切っても、緑が残っているようにしたいわけです。しかし、具体的にどうすればいいか。技術的なノウハウは、いまのところ試行錯誤の段階です。また、それ以外の問題についても、なにひとつ答えが見つかっていません。またみつからないからこそ、2～3年は現地において、答えをさがしてみたいと思うわけです。（拍手）

中部リサイクル運動市民の会

5年前から、名古屋を中心に不用品のリサイクル運動を続けている。紙は森林の木を切って作られている。だから本をリサイクルして得た資金で砂漠に木を、と国内と海外を結ぶ運動を試み、1000万円近くを作り出した。

砂漠に種をまく人の会

自然農法40年の集大成として砂漠の緑化に取り組みたい福岡氏と、経費などの問題からも、無農薬・無肥料の農業に取り組まざるを得ないJVCが、乳研連合、中部リサイクル運動市民の会を仲介に作った組織。

今夏、福岡氏、鶴田氏、青木氏（乳研連合）の3氏をソマリアに派遣する一方、古本の回収、リサイクルを中心に資金集めを行なった。

そのうち3種類ほどが有望ということです。ここでも、毎日ドラムカンで240本もの水を灌漑していますが、ディーゼルポンプとトラックの燃料が問題になっていました。

問題が大きいからこそ、答えを捜す情熱が湧く

さて、私は短かい視察のなかで、いくつかの問題点に気づきました。そのどれにも答えがでたわけではありません。逆に答えが見つからないからこそ、現地に2～3年行ってみようと思ったわけです。ぜひ、みなさまの知恵もお借りしたいと思います。

ここでの問題は大きく分けて、4つあります。人の問題、自然環境の問題、時間の問題、技術の問題の4つです。もちろん、この4つが複雑にからみあっているわけですが、この視点からお話します。

まず、人の問題です。難民は非常に不安定な状況にあります。ソマリア政府の政策が変わって、いつ別の土地へ移されるか分かりません。また、本国に帰還するかもしれません。内面と外面から、自立の意志が弱まっても不思議ではありません。またプログラムをすすめる側の人間の問題もあります。半年や1年では分かるはずがないのです。今回の視察でも、JVCの現地スタッフに「また入れ替わるのか、オレたちはずっとここにいる」といわれました。この地では、灌木を伐採して農地にすることを試みて失敗すれば、すぐに砂漠化します。援助する人の質の問題があります。

次は自然環境です。雨が少なく風の強い気象は、表土の飛散や流出をもたらします。また強すぎる日射しや温度の高さも問題です。太陽の強さは、植物の成長を早くする面もあるのですが、土中の有機物

福岡正信氏

愛媛県在住の自然農法実践家で著書『わら一本の革命』などで、海外でも有名。氏の主張する農法は「無の哲学」の実践であるとか。不耕起、無肥料、無農薬、無除草に無剪定を加えて、5原則としている。ただし、その機能を「自然」にさせることにより、水準以上の収穫を上げている。72歳

乳研連合

子どもたちに本物の食べものを、ということで始まった会。北海道の牛乳を扱うことから始め、各地の有機農業生産者を組織している。農業、有機農業を勉強するうちに、外国だけでなく日本の土壌も農業などで荒廃していることを知り、福岡氏と出会った。現在1万5000世帯を会員としている。

ソマリア農場の歩み

1983.3~1985.9

1983年10月から難民労働者とブルドーザーによって開墾された50haの農地は、4つの農場に分割されそれぞれ、ハルガン農場、ワダジュール農場、ヘーガン農場及びUnit 4と命名され、ディーゼルポンプによる灌漑農業が始まった。ハルガン農場(旧称Unit 1)は、あらゆる部族でその農民を構成したため、まとまりがなかった。その上農民の大半が遊牧民で、農業に未経験であったため当初から困難の多い農場であったがこれは、部族の壁を越えられるかというJVCの試みでもあった。それに対して、ワダジュール(旧称Unit 2)、ヘーガン(旧称Unit 3)両農場は、どちらも親戚部族を構成された。彼らはエチオピアにいた頃農耕民であったため、共同作業がゆきとどき、現地に適した農法をJVCのスタッフが学ぶ事も多かった。Unit 4については、現在も建設中である。

特に、このUnit 4では、作業の難行から、開墾された20haの土地は、裸地のままとなった。開墾前にはブッシュが茂り、自然の生態系は均衡を保っていたが、それが砂塵の舞い上がる砂漠と化してしまい、植生による生態系回復の必要性を迫られた。そこで、エンサイ(中国野菜)やイピルイピル等が植えられ、見事な繁殖力を見せることとなった。特に、エンサイは、砂でつくられた主水路を全て覆ってしまい、強風や砂塵による害を守った。

また、サトウキビも、栽培が簡単であることや、アルカリ土壌のためにおこる塩害も少なく、期待の大きな作物となっている。一般に、乾燥地には、イネ科の植物が強いようである。

ハルガン、ワダジュール両農場では、1984年の7月に播種されたトウモロコシが、10月には初収穫を迎えた。これは、かなりまとまったものとなったが、その後は、各農民の播種時期の差や経験の差等により、各農民ごとに漸次収穫にズレがある。

ソマリアは1年の内雨季が2回、乾季が2回あり、気温や日照は、年間を通じて作物の生育条件を満たしているため、水さえあれば常時栽培が可能である。日本のように、いっせいに播種したり、収穫したりといった習慣のないこともその理由である。

また、トウモロコシのみの栽培を続けると、土地





農場でとれた大ナスとピーマン

が荒れてゆくので、収穫の際に、根を残して土壌に還元するとか、豆科植物を混作し、地力を維持することが必要になってくる。豆科植物は、土壌の養分として欠くことのできない窒素を固定し、地力を維持するのである。ところが、トウモロコシの茎は家畜の飼料となるため、元来遊牧民であった彼らは根こそぎ収穫してしまい、土壌に還元するようになるにはまだかなりの時間が必要である。

しかし、1985年度の作付け状況を見ると、トウモロコシと豆科植物を混作するようになっている。栽培作物が豊富になってきたことには、試験農場が非常に貢献してきている。これは1984年3月、0.4haという狭い面積ではあるが、日本人の農業技術者によって作られた。ここでどの作物がこの土地に適しているかを実験し、さらには農民に紹介してきた。エンサイをはじめ、あらゆる作物が、最初にここで栽培されてきたのである。栽培作物の増加により、現在、更に1haが開墾されている。

播種から収穫までの過程において、主水路の修理やディーゼルの管理、ポンプのメンテナンス等、個人のレベルでは不可能な種々の作業が漸次必要となっている。ハルガン農場は、異部族の農民で構成され、そのことが種々の障害となってきたのだが、次第に共同作業で主水路を修理したり、自主的にミーティングを開くなど、農場委員会としてまとまってきたことは大きな収穫である。

	人の動き	農場	試験農場
1983年			
3月	柴田久史, 田島誠, ソマリアを 来訪。農業プロジェクトを行う ことに決定		 エンサイ (ヒルガオ科)
9月	税田芳三着任	ボランティアの住居建設	
8~10月		難民労働者による開墾作業	
10月	山賀望幸着任		
10~12月			
1984年			
1~3月		ブルドーザーによる開墾 ハルガン農場主水路建設	メイズ (トウモロコシ) 播種
2月	高橋一馬着任		収穫 カボチャ, キュウリ, トマト, ソルガム, 玉ねぎ, ナス, ゴマ, サトウキビ, トウガラシ, スイ カ, エンサイ, オクラ, さつま いも, カオピー, パパイヤ及び 苗床 各々, 順調な発育を見る
5月	掛村均着任		
4~7月		ワダジール農場主水路建設及び 農民による第二水路と柵の建設 ヘーガン農場主水路建設始まる	
8月		ハルガン, ワダジール農場で播 種	
8~10月	農大生ボランティア2名参加	Unit 4 主水路建設始まる	
9月		ヘーガン農場で植付け開始	百葉箱設置
10月		第1回目の収穫 (メイズ) ハルガン, ワダジール両農場 で収穫。又, ハルガンの農民 が自主的に会合を開く	
12月		この時期にディーゼルが不足し 難行 メイズも立ち枯れを程す る	
	 イビルイビル (豆科)		キャッサバ, バナナ, キャベツ も栽培
1985年			
1月	柴田久史帰国	混作が始まり, 栽培作物も豊富 になる。	
4月	米澤聡, 柿原建三着任		更に1haの拡張を始める
5月	久保祐輔着任	雨期に入り, 作物は順調に成育 メイズ, ソルガム, 唐人ビエ 玉ねぎ, さつまいも, ゴマ インゲン, 緑豆, スイカ, カ ボチャ, ナス, トマト, トウ ガラシ, サトウキビ	
9月	中川正憲着任	病虫害の被害がでる (6月)	

ソマリアでお料理教室

かくたまさえ

——角田正恵さんに聞く——

農業プロジェクトが軌道に乗っている一方で、新難民の流入も相変わらず続いている。エチオピア国内の飢餓民に比べれば体力はあるものの、衰弱し、病気に対する抵抗力を失った者や栄養失調児も多い。JVCは今年の2月からこのような人々のために補助給食を行っている。角田さんは5月から8月まで栄養指導のためにソマリアに派遣された。新たに難民の生活改善の一環として料理教室をはじめたという。

私がルークに入ったのは5月ですからプロジェクトが始まって4カ月経っていました。調理の材料や仕方の工夫も考えていたのですが、それは必要ありませんでした。もう補助給食のメニューは決まっています、スキムミルク、CSM*、ソヤビーンズ、トウモロコシ、ミルクなどを混ぜて粥状にし、砂糖と油を加えたものです。登録者は800人ですが、実際に来るのは700人ぐらいでしょうか。普通は1日1回ですが病人や妊産婦には量や回数をふやします。

将来的にはJVCの農場でできた野菜などを使って供給できたらと思いますが、まだ市場に出すほどの量にはなっていません。

お料理教室ができたきっかけですか？農業技術者の高橋さんが農業だけでなく、農民の生活改善のためのプロジェクトを加えたいといわれたのが最初です。彼らは農民といいますが元は遊牧民が多く、あまり野菜の食べ方をあまり知りませんから。

帰国する前の最後の1カ月でしたが、倉庫、食料調達、配水などの準備をすませ、3週間だけ教室を開きました。期間が短いため途中で放棄することになるのではないかと躊躇したのですが、とにかくとっかかりだけでも作ってほしいということでやってみたわけです。それに今までスタッフは難民1人1人がどれだけ食料配給を受けているのか正確には知りませんでしたし、食生活や家庭生活もよくわからないという状態でした。ですから難民の生活を知るチャンスでもありました。

教室は週4回、月・木は私がソマリア料理を習い火・金に私が教えました。生徒は9人か10人でそのうち2人がアシスタントでした。1回の費用は日本

円で800円ぐらいです。

〈ウドンは失敗〉

お料理教室のメニューですか？カレーはケニアなどでは好まれているのでやってみたのですが、初めてだったので馴じまなかったようです。

ソマリアはイタリアの植民地だったのでパスタをよく作ります。パスタはよく乾かせてからゆでるので、食べようと思う日の2、3日前に作らなければなりません。ウドンなら作ったその日に食べられますし、こねて手でのばすパスタよりめん棒を使うウドンの方が効率的だと思ったのです。ところがウドンはゆであがってから何度も水を替えなければならず、水不足のソマリアには不向きであることがわかりました。こうして少しずつ試行錯誤していくのですが、時間が短かったので納得いくまでできなかったのが残念です。

またこんなこともありました。私は献立を主食と主菜、サラダに分けて、必ずこの3種類をとるようにしているのですが、ソマリアの人々にはこれらを別々に盛るという習慣はないのですね。大皿に全部盛って主食の上のおかずもサラダもいっぺんに食べてしまいます。家族が車座になってそれぞれ手を出してね。

彼らはトウモロコシが好きでよく植えたがりますが、水が少なくてすむコウリヤンやヒエ・ソバの味を覚えてもらうため、これらの雑穀を使ったクッキーやパンケーキも作ってみました。パリパリのものとサクサクしたものとしっとりやわらかいものと3種類作って食べ比べてもらおうと思ったのですが、これらを全部一度に食べてしまって食べ分けるといことがないのですね。

評判が良かったものですか。そうですね。甘いものでしょうか。お菓子類は好評でしたね。そりゃ作れば何でも「おいしい、おいしい」といって食べますけれど。

〈女は冷や飯を食べる〉

それからお料理教室は男の人にも評判がいいのです。なぜだかわかりますか。実は女の人がお料理をしている間男の人は農業講座を受けていて、でき上がったものは男の人も食べるのです。男の人もというより4分の3は男の人が食べてしまいます。それも最初のいいところをね。彼らはイスラム教徒なので決して男と女は同席しません。まず男性が食べて、

*トウモロコシ、大豆混合粉乳

その姿が見えなくなってからはじめて女性が食べるのです。そのころには冷えて、底の方のこげついた部分だったりするわけです。せめて半々にしてほしいと思ったのですが習慣を破ることはできないのですね。どんなにせかしても男性が食べ終るまでは彼女たちは決して食べません。

私は以前にネパールに行ってますのでソマリアでも特に困ったということはありませんでした。ただネパールでは十分に語学を学ぶ時間がありましたが、ソマリアでは期間が短かく、通訳なしでは活動できませんでした。やはり短期間では無理がありますね。

ネパールは貧しいですが自立し、村を形成しています。それに比べて難民キャンプは歴史もなく人々も寄せ集めです。人がわき出てあつという間に村が

でき、また消えるという不安定な生活です。情緒も不安定になります。それでも自分たちの生活・健康は自分たちで守らなければなりません。全体的に見れば体力も向上してきているようですが。

最後にルークの人たちに伝言です。ちょっと働かすぎが心配。自分で自分のことは守るというのは難民の人たちばかりではありませんよ。普段は現地食を食べて、病気の時に日本食を食べるようにして下さい。病人になるとどうしても日本人になってしまいますからね。それから台所がもう少し清潔にするように改善を望みます。それではほどほどにがんばって下さい。

(角田正恵さん：大分県生まれ。1973年から1976年まで)
栄養士として JOCS からネパールに派遣される。

砂嵐の中で

角田 正恵

ある日、マグドールⅡの新難民の家庭訪問に出かけた時のことである。後から追って来て、我が家にも立ち寄ってくれという男性がいた。双子の子供が生まれて10日ほどになるが、母乳が出ないという。この母乳が出ないと訴えられることが目下最大の悩みである。道すがら、はて、もしもほんとうに母乳が出ていなければどうしようか。一般の家庭状況から考えてもボトル・フィーディング^{注1)}は無理だし、かといってフィーディング・センターで用意できるのはせいぜい1日2回だし、それでも無いよりはましか。しかしこの家はフィーディング・センターまで相当な距離があるな、などと考えながら歩く。その家のムンドル^{注2)}はけっこう大きくしっかりしたもので男性の服装から見ても多少のゆとりは感じられたが、大同小異の難民であることにはちがいない。

まずは母親と子供をみてみましょうと内側へ入る。

子供は確かに小さい。2.5 kg 前後の二人である。しかし幸いなことに母親の乳房はかなり張っているし、乳房を押すと母乳はピューと飛んだ。産後1カ月間産婦は強化食として1日2回の給食とスキムミルクがドライフードとして与えられることになっている。

生まれたばかりの子供には母乳が最も適していること、不用意に子供にミルクなどを与えて下痢を起こしたら生命の危険もあることを納得させ、母親に強化食を受けさせるよう説得する。翌日からその父親は毎日フィーディング・センターまでせせと妻のかわりに通ってきた。

そのうち給食の内容がかわることになる。家庭の持ちかえりのドライフードの是非が議論の対象になり、配給所での給食体勢が打ち出されることになる。とたんにその父親はスキムミルクを要求しこちらの説明には耳をかさず、給食すらも拒否して帰っていった。いったい妻に何と説明するのだろうか。そういえばあの家庭訪問でも、

その後の家庭訪問でも一方的にしゃべっていたのは父親1人であり、母親はだまって子供に乳を飲ませていただけだった。

また2、3日後には別の若い父親が妻と重度の栄養失調児を連れてセンターにやってきた。身長・体重比はやはり70%以下で強化食を必要とする緊急ケースである。

登録をすませ、今日からさっそく給食の開始をつけ、給食内容の説明にはいとドライフードはないのかと聞いてくる。ドライフードは必要ないこと、ここで与えられる食事をきちんと与えれば必ず回復することをつけても受け付けず妻をうながし、登録を取り消し帰っていった。じつと子供を胸に抱き、ただの一言も発せず黙って夫についていったその母親の後ろ姿はさびしそうで細い裸足の足どりは弱々しかった。

これらのことで、マグドール難民が我々(JVC)に期待すること、JVCが地域に期待することの落差を理解していただけたであろうか。

6月から8月は風の季節である。一滴の雨も降らず、草木の緑は色あせ、一日中吹き荒れる砂塵の中で全ては茶の砂ぼこりで被われる。そんな時、私の胸に焼きついている光景が、このJVCと難民の姿を写し出しているようで感慨深いものがある。

私たちはいつもジープに乗っている。突然に襲ってくる砂嵐。窓を閉めれば外界をびしゃりと遮断してしまえるこの近代兵器。フロントガラスは砂塵の中に停んでいる1人の男の姿を写し出す。男は後ろを通りすぎるジープにも気づかずただ砂嵐の通過を身をすくめて待っている。このジープが防壁なのか障壁なのかわからないが、ただ私たちは砂嵐さえも共有できないところにいることはたしかである。

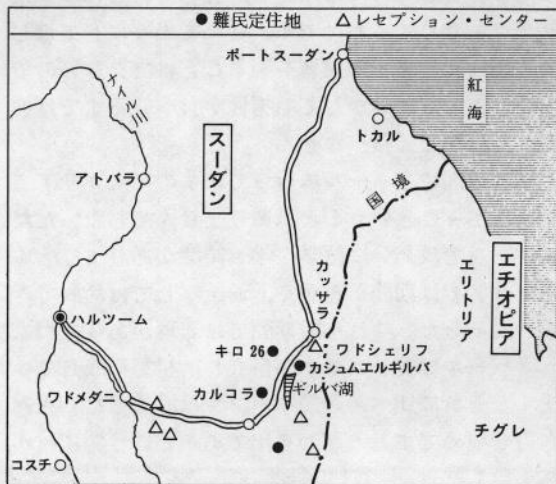
このことで私は以前のように失望したり、落胆したりあまりしない。こんなものだという思いもある。そしてJVCの若さに期待もしている。何時間でも話し合ったり討論したりできるエネルギーは稀有のものである。あとはこのJVCの時間の積み重ねとその継承にある。

注1) 哺乳びんによる給食 注2) 円形の床、わら屋根の住居

スーダン

集荷地、ポートスーダン

スーダンは、紅海に面して海岸線が長く延びているが、ポートスーダンが唯一の利用可能な港である。スーダンへ入ってくる全輸入物資のおよそ85パーセントが、この港で荷揚げされる。その半分以上を救援物資が占めている。このため、そうでなくても貨物の処理能力に限界のある港湾設備の使用や燃料、台数の少ないトラックを巡ってかつてない競争が繰り広げられている。



REFUGEES

どう解決する

1000台以上のトラックが列をなす

筆者が当地を訪れた時、広大なトラック集結地の真中に積荷を満載したトラックの長い列ができていた。「あの給油ポンプがなければ、待機中のトラックの4列のうち2列は全く動きがとれない。一体どうなっているのだ？」と若者が大声をはりあげている。30分後やっと代りの給油ポンプが届けられることになった。彼の名前は、ジョン・ブリットン。スーダン政府と UNHCR の難民援助計画の実施団体となっているアメリカの民間団体 CARE の救援物資輸送の責任者である。

数ヘクタールの広さをもつこのトラック集結地は、通称キロ・エイトと呼ばれ、ハルツームに向かう幹線道路沿いにあり、ポートスーダンからちょうど8キロ離れたところに位置する。そしてポートスーダン港で荷揚げされる物資をトラック輸送するための給油・発進基地となっている。救援物資を満載したトラックが、ここから難民の生命線ともいべきアスファルト道路を通して、50万人を超える UNHCR の援助を待つ難民のもとへと向かうのである。どんな日でも、1000台以上の車輛が給油や通行許可証の発行を待って列をつくっている光景が見られる。小

麦粉や毛布・テント・木炭等の救援物資を積載した大型トラックや給水車、タンク・ローリー車などである。1日から長いときには、5日も待たされることもあり、退屈した運転手たちは、運転席で昼寝をしたり、喫茶店や煙りのたちこめる食堂で暇をつぶしている。

紅海山地の麓にあるここキロ・エイトは、昨年11月にスーダン東部に流入するエチオピア難民が急増して以来、国際救援の食糧やその他の物資をとり扱う一大補給基地となっている。スーダン国内の28カ所の難民レセプション・センターと定住地に向けてここから救援物資が送り出されている。それとともに、救援物資の補給上の諸問題がここキロ・エイトに集中してあらわれている。

2万トンの貯蔵能力でも不足

ポートスーダン港は、貨物の処理能力に限界がある。そこでやっと荷揚げされた救援物資をいかに効率的かつ迅速に、エチオピア難民やチャド難民のもとに届けるか。補給体制をいかに確保するか。このために解決しなければならない現実的な課題は多い。

例えば、救援物資の一時保管用倉庫は、ポートスーダンでは割増し料金を払わなければ確保できない。

さらに仮りに倉庫がみつかったとしても、こんどは貯蔵能力に問題がある。CAREは、こうした賃貸倉庫を2つ使っているが、この2つの倉庫を合わせた最大貯蔵能力は2万トンが限度という。他方、4月の1カ月をとっても、8000トンを超える食糧(主として穀物)を扱っており、今後さらに取扱量が大幅にふえる見込である。

やっと荷揚機が設置さる

つぎに荷揚作業の問題がある。毎週西ヨーロッパ・オーストラリアその他から4～5隻の船舶が救済物資を満載して入港してくる。穀物や豆類から毛布・油・殺虫剤等の船荷をトラックの荷台に直接荷揚げしている。通常この荷揚げに要する日数は3～4日。しかし、港が混むと1週間もかかることもある。

今年4月から特製の新式穀物搬出機が稼働を始めた。貨物船から直接波止場の倉庫へパイプを通して荷揚げすることが可能となり、文字通り1500トンクラスの貨物船の船倉をからっぽにしてしまう威力を発揮している。あとは倉庫で梱包機械を使って自動的に袋に詰めて縫い合わせ、輸送しやすいように穀物の袋詰めをして発送準備が完了する。以前は、袋詰めと縫い合わせが全く手作業であったために、時間の浪費と穀物の目減りが深刻なものであった。

第三の問題として、繁雑な通関手続があげられる。このところスーダン政府と地方の行政当局の協力のもとに改善がみられる。お役所仕事によって通関が遅れないように、通関当局もしばしばUNHCRの保証状があれば必要な数々の手続きを省略するといった形で協力してくれている。

物資輸送



UNHCR 国連難民高等弁務官事務所
広報誌「REFUGEES」より

深刻化するガソリン不足

もうひとつの深刻な問題は、燃料の不足である。CAREは最近まで輸送トラック隊の燃料の補給を政府保有のものに頼ってきた。しかし恒常的な在庫不足のため、難民やキャンプへの定期的な食糧輸送さえ常に3～4日の遅れが生じていた。ひどいときには、トラックを3週間も待機させねばならないこともあった。しかし、この問題も、今年4月にCAREとUNHCRがシェル石油から約3000トンの燃料補給の保証をとりつけることができ、事態は改善に向かい始めている。この結果、CAREはガソリン・スタンドの経営まで引き受けることになったが、ブリットンの話では、「我々の目標は、その日のうちにトラックを満タンにして出発させることだ。待機のための時間がないことが分れば、運転手の士気も高まる」。ブリットンの管理している給油ポンプを使って、現在1日に50～90台のトラックに給油しているということである。

他方、輸送費の高騰が輸送の遅れの原因の一端となっているという見方もある。ここ2～3カ月の間に、ポートスーダンから難民キャンプのひとつがあるカッサラまでの輸送費が燃料費は別として45スー

ダン・ポンドから90スーダン・ポンド以上へと2倍も値上りしている。

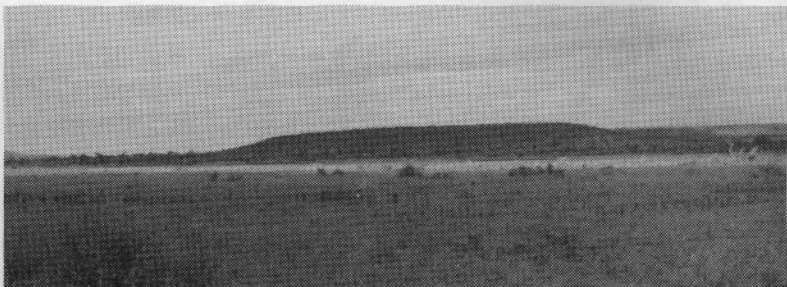
どだいトラックも不足している

その他にも解決すべき問題が幾つかある。トラックは相変わらず極端な台数不足である。援助機関はほとんど大型トラックを持っていない。そこでスーダンの民間運送会社やときによっては個人所有のトラックを1人ひとりの運転手と交渉して借り上げねばならなくなることがある。ブリットンはそのように説明する。「トラックの供給には限りがある。借り入れる時は、USAIDやSUDANAIDといった他の援助機関や民間との競争になる。スークと呼ばれる市場に出向いて車輛を捜すのが毎日の日課になっているが、なかなか車を手に入れるのは難しい仕事だ」。ある意味で救済物資の補給は、時間との競争だといえる。5月はじめの時点になっても、ブリットンはまだクーデターの際に行われたゼネストの影響で生じた5日間の輸送の遅れを挽回するのに大わらわであった。一部の地方では、この時期すでに雨期が始まっている。幾つかのキャンプでは輸送道路が途絶するおそれがあり、救済関係者は緊急食糧の備蓄をふやすのに懸命である。

ソマリア

ルークからの便り

ソマリアの南西部、エチオピアとの国境から遠くないルークの難民キャンプを筆者が前回訪れてから5年を経た。さる8月、「アフリカの角」にあるこの半砂漠の国を再訪し、1カ月余り四輪駆動車で走りまわって、状況がどのように変わったかを見た。



'83 開墾前のマガネイ

ルークはモガディシュからゆうに400キロはある。途中舗走路は少なく、ほとんどの行程がじゃり道か、わだちのついただけのまばらな灌木地帯をぬける「道」であるが、以前より少しは良くなっている。中国の道路整備チームによって、補修や舗装がなされた区間もある。しかし、道のりの大半はおそろしくがたがたする悪路のままだ。

もちろん、モガディシュから週2便あるセスナ機を使えばルークまでは2時間とかからず、がたがた道に8時間も揺られる必要はない。しかし、この国がかかえる問題は、陸路で旅して初めて本当に理解できる。

ルークはソマリアのゲドー郡の中心地で、近くにはジュバ川に沿って難民キャンプが8カ所あり、エチオピア難民約13万2000人が生活している。ここに物資(食糧・医薬品・機械部品・ガソリンなど)をモガディシュから届けるには、トラックで運ぶ以外に方法はない。これには普通、往復3日かかる。運転手は昼間の猛暑を避けて夜間に灌木地帯を走行する。車両の管理は1981年からアメリカの救援機関CAREの緊急輸送部門(ELU)がUNHCRとの契約の下にあたっている。しかし、道路の状態があまりにひどいので車両の消耗が激しく、現有の車両はすべて新しくとりかえる必要があるという。「道路さえ良ければ、車の耐用年数が長くなるんだが、みんなこの道路がどんなにひどいか時々忘れるようだ」とミロ・カマストラ ELU 部長は語る。

定住化する難民

筆者はルークに着いて、あまりに様子が変わっているのが驚いた。町は大きくなったが、難民が流入

し始めた頃のあわたたしさはなくなっていた。外国の救援機関が少なくなり、残っている救援団体も以前のような間に合わせのテントや小屋には住んでいなかった。プレハブの住居や事務所、トタンでできた倉庫、自動車修理場などはるかに機能的で長期的な施設がUNHCRとCAREの手で作られていた。

しかし、最も大きく変わっていたのは、キャンプの中であった。時の流れなのだろうか、キャンプはまるで半永久的に存在しているかの様であった。

1万8000人余りの難民をかかえるアリマタンはこの地域における最大のキャンプのひとつで、依然として国際的な援助に全面的に依存しているものの、活気ある農村定住地になっていた。ルークから9キロほど南にあり、このキャンプの難民の生活状態は、多くのソマリアの地元民と比べて良いとはいえなくても、同じ程度の水準は享受している。

1980年当時は、あたり一面にみすぼらしい「アカル」(小枝やボール紙、布切れで作ったドーム型の住居)が見られたものだ。しかし、今では、ワラや小枝を編んで作った見栄えのよい広い小屋に変わっていた。保健所と小学校が2校、コンクリートで建設されている。以前の一時的な給水設備は、もっと効率のよい浄水施設に替えられている。まわりの殺伐さと対照的に、どこかの敷地にも日よけのための木が1本か2本植えてある。子どもが何人も笑いながら、学校で習いたての英語を大きな声で口に、歩きまわっている。トタンの切れ端などで作ったおもちゃの車を引っぱって遊ぶ子どももいる。この活気は、以前の病気でやつれきった難民のイメージとはあまりにかけ離れていた。

ソマリアの他の地域と同じように、ルークに最初の難民が流入してきたのは、ソマリア・エチオピア

戦争があった1978年で、難民は主にオガデン地方出身の遊牧民であった。それから2年間も、何万人もの農民や半遊牧民が難民としてエチオピアのバレとシダモの両地方からやってきた。彼らの大半は、戦争と過酷な抑圧を逃れてきたというが、飢餓や飢きんも逃亡の原因のひとつだ。UNHCRとソマリア政府職員によれば、これに加えて、1984年の6月から9月までに1万1000人が新たに国境を越えて流入してきたと報告されている。

他方、キャンプに住む難民の多くが帰国を望んでいるという。いつの日にかは帰国も実現するだろうが、状況が好転しなければ帰れない。難民はソマリア南東部の農業に適した豊かな土地に移ることも承知しない。「あそこは遠すぎる。ここにいれば国境は近くだし、帰りたいたときは簡単に帰れる」と、ある若者は語る。しかしシダモ出身で、7人の子どもを持つ未亡人のクーラン・イサウ・アリさんのようにアリマタンに残ることに執着する者もいる。「昔は、農地があって家畜もいた。今は何も無いが、少なくとも安全です」。

自立のためのプロジェクト

1983年始めから、ソマリア政府は難民の農村定住計画を推奨している。これは、少なくとも難民が一定の自立を達成できるよう手助けすることを狙ったものである。国際的な難民援助の大半を提供している西欧の政府は難民の援助への依存を減らすためソマリア政府がもっと建設的な対策を講じるべきだと考えている。難民にも自給自足の機会を与えるべきだと主張する向きも少なくない。「難民が自分自身の生存の糧をほどこしたよるといえるのは道徳的にも心理的にも彼らを損なうものだ」。「人間の尊厳に対する侮辱だ。難民にも自分たちのために働く機会を与えなくてはならない」と、ある西ヨーロッパの外交官は述べている。

難民の自立プロジェクトがいくつか開始されていた。そのひとつがルークの12キロ南西にあるマガネイ・キャンプの難民農業プロジェクトである。これは、1984年、政府の難民農業局と日本国際ボランティアセンター（JVC）が開始したもので、現在では4つの共同農場（それぞれ6.5～20ha）を持つまでになっている。このプロジェクトには農民が参加しているが、遊牧民であった者も数多い。

定住地に隣接する農地では、ジュバ川の水を使っ

てかんがいた土地に、とうもろこし、モロコシ、

サトウキビ、玉ねぎ、パパイヤなどの野菜や果物を栽培している。「これで彼らが自立できるわけではない。しかし、少なくとも自分たちで消費する分の余剰を販売することもできた」と、農業専門家サディク・ムハマッド氏は語る。

農民は畑仕事にもどることを喜んでいるようだ。白いずきんを頭にまいたやせぎすのマル・アブディさん（バレのゴルバ出身）が次のように語った。

「この土地はそれほど良くはない。これでは、テフ（エチオピアの伝統的な穀類）も作れない。けれども、なにがしかは得られる。穀物が3～4袋だ。一家に十分な量ではないが、最初だし、新しい農法も学んでいる」。この半砂漠地帯では耕せる土地は限られているため、相当のかんがいが必要である。

植林も軌道にのる

ソマリアやスーダンなど難民をかかえている地域はどこでもそうだが、灌木地帯でマキをあまりに集めすぎて、深刻な事態となっている。すでに1980年当時、筆者は女性と子どもが燃料のマキを求めて日がな一日、荒地地帯を探し続けていたのを思いおこす。キャンプのまわりの地域では灌木や立木が完全に引き抜かれて、はげ地と化していた。今日、全体的な状況はさらに悪化している。しかし、まだわずかではあるが、木を再生する試みが始められている。

インターチャーチ・レスポンスという民間団体が、1983年から難民の植林プロジェクトを続けている。プロジェクトは成功し、最初の段階で2万1000人の難民が参加した。このプロジェクトは、いくつか障害があったので少しずつ進められている。しかし、結果はすでに明らかである。アリマタンの日よけの木はその一例にすぎない。もう一つの例は、ジュバ川の土手でソマリア林野庁が始めた実験的な苗床である。このプロジェクトは現在USAIDが引き継ぎ、240haの荒れた土地に植林し、この地を森林地帯や定住地、避難場などにしようというものである。また、地元住民の利益をはかって、町自体に樹木や防風林を植えることも考えられている。



'85 開墾されたJVC農場

Dear, My Friend

(原稿、お待ちしています。1000字ぐらい。)

スラムのできごと

高塚政生

インドシナ半島での出来事は、ある意味では、幅広い人々に難民問題を身近なものにさせました。それは同時に、私達が世界の中でどの辺に位置するかを意識させた現象でもあります。しかし、“ベ平連運動”などを持ち出すまでもなく、実は継続する歴史の結果として出て来たものであって、突然に起こった事件ではありません。アフリカの飢餓民の問題も同じ様に突然現われた悲劇ではないのです。

世界と関わるということは、歴史を考える者としてとか、歴史を解決する者としてとか、観察する者としてとかで関わるばかりではありません。そこに人の顔を思い浮かべ、会話があり、生活がある中で関わるという事です。

まだクロントイ、スラムの中に住み始めたばかりの頃、すでに顔見知りであったおばさんが、JVCの車を貸してほしいと頼みにきた事があります。もちろん、運転手付きで。この人は看護婦として働いている人でした。その理由を尋ねると、身ごもっているある奥さんに、陣痛が始まったというのです。私達の使っている車は、JVCのものなので、私用に貸す事はできないと言って一度は断りました。私達には他に用事がありましたので、そのまま車の置いてあるところまで行きかけると、しばらくして又追いかけてきて「その奥さんは病院に行くためのタクシー代もなく、とにもかくにも、もう生まれそうだから何とか乗せてってくれ」と、それはもう真剣なまなざしでした。こちらもそれは大変だという事で、福村君が用事を足しに行き、私が病院まで送るという事にしました。途中で、また別のおばさんに念のためにつきそってもらうことにしました。

さてでは、どの道を走るのかと尋ねると、実はまだ病院に行った事はなく、今日が初めてなんだという。病院の名はウイメンズ・ホスピタル。つきそいのおばさんも、殆んどスラムを出た事がなく、その

病院がどこにあるのか知らない。その病院は、貧しい妊婦は無料で診察、分娩させてくれるところという事を聞いていたので、そこへ行こうと思ったという。でも行ったことはない。しょうがない。そこでつきそいのおばさんが、助手席の窓を開け、通る人通る人に大声で尋ねる。二人の間ではおなかの大きい女の人が、大声でうめきながら身体をよじっている。今にも生まれそうな雰囲気。もし車の中で産まれたらどうしようかと不安におそわれる。ピックアップ型のトラックで横に三人が座れるのみの狭い空間に定員通り満席、出産できるような広さではない。待てよ。へその緒は何で切れればいいんだ？いやいやそれより、頭が出始めるとこんなか確かめようがないじゃないか。

「ウイメンズ・ホスピタルはどこ？」「アッチ！」、
「ありがとう！」とおばさんもいよいよあせる。どうにかこうにか病院に着いた。おばさんは車が着くよりも早く中に知らせに入る。ストレッチャーが来る。分娩室に入る。「オギャー！」間一髪、イヤータまげたもんです。

1979年にピークを迎えたインドシナ難民報道とともに人が、お金が寄せられ、そんな中でJVCが誕生してから早や6年。最近では、アフリカ難民、飢餓民問題がより悲惨でより救援を必要としているとのアピールに、インドシナ難民の問題は、忘れ去られそうです。しかし、その質、規模は変化しながらも、救援活動は続いています。前述の情景は、バンコク市内のスラムのある一日の一コマですが、その人々の事はもう忘れようがありません。新聞やテレビでタイのニュースや紹介があるたびに「タイ」という言葉が、その御婦人達の顔を呼び起こします。もちろんインドシナ難民の人々も一緒です。一度関わりを持ち、友達となったら忘れるものではありません。他国を知り、異文化を知り、それを受け入れるという事は、その人々と一人でも多くの友達を作り、顔を思い浮かべる事だと思えます。発展途上国での戦争や貧困を友達を通じて親味に感じ、一時的でなく継続的につきあって行きたいものです。その意味でもインドシナ難民救援やタイでの協力活動は、細くても長く続けなければと考えます。

『New Internationalist』

——世界の開発の問題を援助団体の
目でとらえる月刊誌——

竹内俊之

この少し風変わりな英語雑誌とめぐりあったのは今から2年位前だったと思います。堀明子さんが星野さんとイギリスのブライトンへ会議のために出かけて行って、帰ってから一冊のコピーを見せてくれたのです。たぶん堀さんが自分のために一冊買って、おもしろいから当時たまたま東京の事務所にいた私に読ませてくれたのでしょう。その時のテーマは「土地は私達のもの」でした。主に国際的に見た土地所有（領有）制度の不平等を取り扱ったものでした。あまり熱心な読者ではなかった私はテーマがとても関心をそそるものでもあったにもかかわらず、すみからすみまで精読しなかったようです。でもひとつだけおもしろかったのが今でも覚えているのは地図の話です。世界地図です。もとより球を平面で表わすのですから色々無理は生じるのですが、私達が小学校の時から慣れ親しんできたメルカトル図法の地図はかなり大きな誤ちがあるのにとっても一般的です。何故一般的だったのでしょうか？それは南の国を必要以上に小さく見せようとした北の先進諸国（帝国主義諸国）の思惑があったことをその記事は示唆していました。実際に地球儀と地図でヨーロッパの大きさをくらべてみると本当にそのちがいに驚いてしまいます。それから海外に出たこともあって忘れていたのですが帰国してから荷物の中にももれていたそのコピーのたばを取り出しておちついてゆっくりと読みたい気持ちになり、購読者となったわけです。さて、前置きが長くなりましたが、この『New Internationalist』とはどんな本なのでしょう？

今まで述べた経緯によりこのT/Eを読まれている聡明な諸君諸賢にはもうお察しのことと思われませんが、以下最近の特集のテーマをならべてこの雑誌の性格、方向性を改めて示したいと思います。

「階級制—教育」、「保健における正義—何故貧困が病気を招くのか」、「雨—アパーボルタの暮し」、「輪の外—少数者の権利」、「投売り—危険な生産物の国際貿易」、「自殺協定—核戦争と平和」、「食糧第一—まんが編」、「未来は君の手に—自分自身の行動



と社会変革」、「お母さんとお父さん、そして子供達—危機に瀕する家庭」、「健康に聡明に—老いゆく人人」、「隠された問題—偏見と社会秩序」、「地球に対する暴力—環境」、「テレビ—媒体とメッセージ」、「宴と飢饉と農耕と—アグリビジネスと食糧支配」、「武器の力—中央アメリカ」。

いかがでしょうか？T/Eをお読みのみなさんでしたら全部とはいわないまでもこの中のいくつかのテーマに関してはとても興味を持たれると思います。これだけ幅広くそして今の世界が直面している重要な問題を網羅している雑誌を私は知りません。それだけではなく問題に対する今までのアプローチに批判を加えたとしても必ず何らかの代替案（もしくは哲学）が示されます。しかし、その論調は時には問題に対する取り組み自体をも否定してしまうほどラジカル（根源的）なものになります。前にあげた特集のテーマのうち二、三をもう少し詳しく見てみましょう。「保健における正義」：もしあなたがアメリカではなくエクアドルに住んでいたとします、あなたがはしかで死ぬ確率は247倍も高くなる。これはエクアドルでははしかが、よりたちの悪い病気だというわけではなく、アメリカにいるあなたは病気に対して、より抵抗力があるということなのです。

この特集では健康と社会的公正がどんなに密接に関係しているかを明らかにします。「階級制—教育」：100年間にわたって教育は基本的人権のひとつとなった。しかしながら大衆教育は大衆に平等をもたらさなかった。文盲はたしかにうち負かしたかも知れないが、権力や権威あるいは開発の必要性ということに対する態度はほとんど問われないままである。

このような観点はJVCの行っている仕事を成功に導くためにはとても重要なことのように思います。JVCが活動している現場の多くは第三世界に属していて、私達は第一世界である日本に住んでいます。第三世界特有の問題というよりほとんどが第一世界（北）との関係にその原因を求めることがで

きます。そのようなことの理解と問題意識なくしては私達の活動は不毛なものとなるでしょう。しかし、南と北の不公平な関係を糾弾するだけのものなら日本にもいくつかあります。私が『New Internationalist』をそれ以上だと考えるのはそのような意義申し立てと同時に常に「では、私達にどのようなことができるのか？」ということをより直接的に働きかけようという方向性のもとに模索する姿勢にあります。このことはどうやらこの雑誌が生まれた経緯と関係がありそうです。

誰れが『New Internationalist』を作っているか？

『New Internationalist』はオックスフォードにある出版組合によって発行され、トロント、ワシントン、メルボルン、バルセロナに編集販売事務所があり、それぞれ通信員と広報協力団体を持っています。もともとはオックスファムとクリスチャンエイドとカドベリー・ローントリー基金が世界の開発についての情報を提供したりキャンペーンのためにお金を出しあったのが始まりでした。今では独立採算の別組織として機能して、その収益は雑誌販売と国連や第三世界の問題にかかわる他団体のキャンペーンなどの仕事の報酬によっています。

援助団体が始めた機関誌的なものが数千の購読者によって支えられていることはT/Eの未来のひとつのあり方をも示唆しているといえるかも知れません。

* 編集部では『New Internationalist』の転載記事を企画中です。

国境からの便り

浜野敏子

タイ・カンボジア国境で食料配給や栄養指導にあっている浜野敏子さんからJVC 東京事務所宛に今後のプロジェクトの方向性について手紙が寄せられました。難民救援は人道的な問題から発しながらも政治的な制約を受けなければなりません。ボランティア活動のジレンマもそこにあります。現在前向きにプロジェクトが展開しているソマリア、エチオピアにおいてもやはり同じような悩みをかかえています。浜野さんの問いかけをタイ国境に押しやってはならないと思います。スタッフも考えます。会員・読者の皆さんも考えて下さい。ご意見・ご感想を編集部までお寄せ下さい。

援助活動に対するこだわり

タイ・カンボジア国境での援助活動、ノンチャンの活動の是非について感じたこと、考えたことをいくつか並べてみます。

援助活動が国境での状況を固定化させているだろうということについては、今後もこだわり続けていかななくてはならないでしょう。私たちの活動は食料配給という物質的援助の側面が強く、実際にクメールの兵士の口に直接入らずとも彼らの家族の食生活を保証している意味で、間接的に軍を支えている大きな力になっているでしょう。私たちの直接の対象者であるお母さんたちにしても、たとえばクメール婦人協会で聞かせてもらった彼女たちの合唱は、自分たちはしっかり家庭を守り、りっぱな子供を育て、賢い婦人となって、男の人たちがベトナム軍と戦い、勝利に導くための支えになろうというもので、かつての日本の愛国婦人会を思い出しました。

カンボジアの難民問題が、政治的解決なくして平和が訪れないのであれば、その方向性を援助にかかわっている者はどうしても考えざるを得ないでしょう。私自身のことでは、カンボジア問題に対する明確な方向性を持ちえないでいる現在において、活動を続けることに一種の限界を感じています。本当であれば自分のポリシーと実際の援助活動が一致しているのがベストであろうと思うのですが、ここでの活動はその点で私にとって難しいものです。つまり頭の中ではこの援助活動が状況を固定化させているのではないか。東西対立の西側に加担していることではないかという疑問と、一方で現場の中で難民の人々と接していて感じる心の部分、つまり何の責任も罪もない人々がなぜこんな理不尽な目に会わなくてはならないのか、その人々が現在を生き抜くために、同時代に同じ世界に生きていく者として、しなくてはならないことがここにあるという思いがいつも行ったり来たりしているのです。

技術者集団でよいのか

このような思いは多分多くの人が持ってきたのでしょう。1980年当時の国境においては、彼らの命を守ることが一番であり、そのための活動として十分その機能を果たしていたのだと思います。しかし5年を経ていつまでたっても同じ戦闘状況がくり返され、人々の生活は安定してきたものの、肝腎の政治の分野での発展が全く見られない現在、単に生命を守るという理由だけで活動を続けていくのは難し

いところきています。これからの活動を支えていくために、カンボジア問題解決のための踏台となるような援助活動の新しい論理を作り出していかなければやっていけないような気がします。仕事として割りきってしまうのであれば別ですが。

国境での活動を単に続けていくこと、また単にプロジェクトの技術的な成功を目標にするだけならある意味で援助活動を不健全な方向に導くのではないかと危惧します。その意味は第一に活動する本人も含めてここでの活動・状況が人々の中で日常化し、問題の根が風化してしまうこと。実際に5年の年月の間に、ここの援助活動がいい意味では安定したのかもしれませんが、今や一種の技術者集団を形成しているにすぎない感じもします。ノンチャンの場合においても、毎日の活動の中でどうしても問題の根を探る議論よりも、いかに効率よく実務をこなすかということにメンバーの中心は集まりがちです。この調子でいくと、日本人がひとつの意識変革の場として、またクメールの人々となつながらあえる場としてのチャンスはノンチャンの中では少なくなっていくことを心配します。

第二に、援助する側とされる側の溝を増長させていくこと。どんなに見た目に活発なプログラムでもそれが助けてあげるためにいい仕事をするという意識において、またはそうでないと理解していても、実際の雰囲気はクメール人と援助する側の人間との間に優劣意識を作り出していくように思います。あるクメール人たちは外国人の援助活動者に忠誠をつくすこと、召し使えることがあたかも彼等の良心になってしまっているようなケースや、また20代の若い外国人活動者が年長の、いわゆる高い地位にあるクメール人にちやほやされている光景があたり前のこととして見える感覚などを恐いと思います。クメールの人々の将来を考えた時この点に考慮することは、人々の自立と銘うって行われる援助活動以上に人々の自立にとって大切なことのように思います。

いずれにしても援助活動そのものが本当に恐くなります。世界の人々とともに生きていきたいという私の思いにおいて、援助に対する良心的な拒否も必要な場合があるかも知れないと思う時もあります。

国境の活動のために議論を

国境での活動に対する疑問点ばかりを並べましたが、だからといって単に引き揚げればいいという意見には賛成できません。私たちはどんなきっかけに

せよ彼らとかかわり、いいか悪いかわかりませんが現在の状態を作り出している責任の一端を担っています。もしここでの援助活動に対してというより、ここのクメール人の将来にとって現在の援助活動がマイナスの側面を持っているとしても、今すぐ援助そのものを中止することは彼らの生命を壊すことにつながります。今の難民の人々にとって、限られた生活環境の中で食料配給の援助はどうしても必要です。その上でJVCが補助給食を中止し、国境から引き揚げるとすれば、それが発展的引き揚げとなるような何らかのアクションをおこすべきだろうと考えます。それがいいから活動していても苦しいわけですが…。

私が一番恐いと思うのは、タイ・カンボジア国境の活動についてJVCのメンバーの関心が薄れ、議論のないまま続けられていくことです。去年のように議論ができるうちはまだ安心だともいえるのではないのでしょうか。

アランヤプラテート以外のJVCのメンバーから、タイの国境プログラムは活気がないとか、もうダメだという声を聞くのですが、私はかつて一度でもこのプログラムにかかわった人たちが現在この問題についてどんな風に考えているのか知りたく思います。ここを去った後も引き続きこの状況を気にして意見を述べてくれたり、疑問を投げかけてくれる人はほとんどいないようにこちらでは受けとっています。物理的に去ればそれで問題は終りになってしまうものなのでしょうか。

特にアフリカで活動をしている人たちがタイで感じた問題点または経験が、現在アフリカで具体的にどのように生かされているのかお聞きしたいと思います。

ノンチャンのプログラムそのものについて気にかかることを少し記します。現在のメンバーはそれぞれ実力のある人々です。それが私たちのプログラムの推進力になっています。実力というのは、ここでは第一に現地での経験、技術、知識、クメール語、英語、タイ語といったものです。ここの活動が5年もすると、いわゆる実力のある人は沢山います。テクニク的に向上することもとても大切なことですが、同時にこの活動を通して私たち自身の意識や考えが切磋琢磨されていくような集団に育っていくために、テクニクではない部分で必要とされる人間がもう少し加わってくれたらと願います。

JVCプロジェクト

1985年11月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>涉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トリアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会～毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時</p>	<p>全国社会福祉協議会 UNHCR</p>	<p>岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢, 高塚政生 佐久木志保, 荻野美智子 前川昌代, 佐久間典子 柴田久史, 他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師 東京, 埼玉, 神奈川, 千葉, 山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。昨年10月より神奈川県大和市に開校した日本語教室は, 7月中旬で第3期を終えた。現在は, 10月中旬より始まった第4期を続けている。地元で参加できるボランティアを募集中。 インドシナ以外のイラン, アフガニスタン難民も対象に活動している。機関誌の『そんぽんと』(クメール語で“手紙”の意)を毎月発行している。</p>	<p>(財)アジア福祉教育財団・難民事業本部 神奈川県福祉部</p>	<p>森山久寿子 地区連絡係11人 他約70人</p>
	<p>*バザー, ハンディクラフト販売</p>		<p>関田鶴子 他約20人</p>
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進 収穫が終わり, 次回の作付けのための準備を行っている。ユニット4(20ha)の主水路完成。4haの荒おこしを終了した。</p> <p>●補助給食/基礎医療 給食センターはほぼ完成した。 5才以下の子供(567人)に対し, 予防接種(BCG, DPT, はしか, 小児麻痺)を行った。</p> <p>●医療施設建設 新難民の移転地がプロブレティに決まり, ホールディングキャンプの建設を開始した。</p>	<p>UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくろう会 創価学会 ジャパン・タイムズ 九段ライオンズクラブ 秋田大学「アフリカ難民を助ける会」</p>	<p>税田芳三(ソマリア事務所長), 山口誠史, 掛村均 高橋一馬, 米澤聡 久保祐輔, 柿原建三 千田悦子, 鶴田三芳 中川正憲, 荻ノ迫善六 モハメッド・アデン・モハメッド, ジャッド・モハメッド・ムザール, ラジッド・モハメッド・ランジャイル, サディック・モハメッド・アリ, モハメッド・ハジ・ヌール, ジョニー・バーグマン 嶋紀晶, 樫田秀樹 中路美和子, 石井弘代 現地スタッフ16人</p>
エチオピア アジバール (ウォロ州)	<p>●緊急医療/入院患者への治療のための給食 入院患者数 約150人 外来患者数 約200人(10月の死亡者 - 34人) 現存の医療活動は来年の1月をめどに終了する予定だが新プロジェクトへ転化するため現在模索中。</p> <p>●林, 内山田を中心に来年度の「総合的復興促進プロジェクト」(5haの農地, 30haの植林, 灌漑用の貯水池, 基礎的開発教育)の視察, 計画立案のため, エチオピア政府(RRC), 地区行政官, 農業協同組合と交渉している。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 神奈川県 ユニセフ・エチオピア CRDA BAND-AID</p>	<p>本田 徹, 内山田 康, 林 達雄, 鈴木妙子 太田律子, 工藤扶美子 福村州馬, 加納 妙 現地スタッフ約60人</p>

活動内容	活動内容	出資団体	担当者
バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー等。 季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行	全国社会福祉協議会 一般寄付	佐藤正喜（バンコク事務所長）、中山清秋 ボンピモン・チャイブーン 原園秀子、斎藤美香代 カモン・ミンムアン 他約10人
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 モーターバイク、自動車、（シリンダーエンジン）の整備と溶接の技術訓練を実施している。 居住者登録がされていない約7200人に食糧配給が開始され、彼らは隣接のサイト7に移動中。	UNHCR レフュージュズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	古西 勇、熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム
タイ・カンボジア 国境 （カンボジア 難民村）	●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による、難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村、サイト2、サイト6にて活動中、活動対象者は4651人。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区医療部会、城西病院 西本願寺 結城青年会議所	クリアクライ・プティヤ ピピン スラ・プロムチャン ヴィジョン
	●補助給食 緊張が続いているが、まだ昨年のような直接的な攻撃はない。UNBROは、現在のサイト2よりタイ国内に近いサイト3を避難地として用意している。	WFP/UNBRO	マーシャ・イシイ 浜野敏子 トンチャイ・クラタルムボン 蓮尾慶治、仲田奈々子 カオエッティ・スリホン カヌエンニット・ソーンマユラ
バナニコム （第三国定住待ち 難民一次収容施設）	●文化オリエンテーション ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める 90余名のラオス人難民がナポー・キャンプから移送されてきた。第1陣は大和定住センターへ移動した。	天理教千葉	浜崎妙子、菊池早江子 ティアン・パントゥー
地域開発	●バンコク市内のスラム地区 奨学金援助：スラム地区定住児童のための学費援助 図書館：6区にあるバンコク市の青少年センターの一角を借り受け活動を開始した。 建材提供：スラム立ち退き者、あるいはスラム内に保育所等を建設する際の物資援助	モラロジ-MIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 サムルエイ・ジョンヨークラン アルニー・プロマ
カンブチア （プノンペン）	●ワークショップ 11月14日自動車修理及び技術訓練を行うための契約をカンブチア政府と結んだ。	（協力団体） ユニセフ・プノンペン事務所	熊岡路矢、箕田健一
人材派遣プロジェクト			
シンガポール （ホーキンスロード・キャンプ）	●UNHCR一ベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟アジアキリスト教会議	ニール・リー
フィリピン （パターン・プロセス・センター）	●国際移民委員会（ICM）一第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

人材募集 ① タイ語のできる人、② 会計のできる人（担当 高塚）

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (11月小計368,292円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
 - B. インドシナ難民救援募金 (11月小計 500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - C. クロントイ・スラム募金 (11月小計 1,500円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - D. デッグ・スラム奨学金募金 (11月小計 50,500円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - E. 日本語家庭教師募金 (11月小計 500円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - F. 医療募金 (11月小計 1,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
 - G. ボランティア募金 (11月小計 3,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - H. JVC運営経費募金 (11月小計 11,507円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - I. 無指定募金 (11月小計 462,961円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶11月12日、ソマリアから山口、柿原の両氏が五体満足で帰国した。これは実のところ快挙である。これまでソマリアからの帰国者は病院に直行し、1カ月もしないとオフィスに顔を見せなかったものだ。ソマリアでの活動も3年目を迎え、ボランティアの生活環境も整ってきたようである。

▶ソマリアの自然は過酷だが工夫しだいで生活を楽しむこともできる。ミーティングの最中に抜け出してジュバ川に釣りにでかけたり、朝早くからマキ割りしたり、岩崎視察団を受け入れた現場はなかなか大変だったらしい。「僕は今まで人を振りまわしたことはあったが、振りまわされたのは始めてだ」。ソマリア事務所長の話である。



昭和60年12月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND

67 South Sathorn Road

Bangkok, THAILAND

☎(286) 4857

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所

JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadish, SOMALIA

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア事務所

JVC ETHIOPIA

c/o Embassy of Japan P.O. Box

5650 Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円